

## 伊波普猷「沖縄人の祖先に就て」

著者名(日)	三笥 利幸
雑誌名	教養研究
巻	15
号	1
ページ	212-177
発行年	2008-07
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1265/00000310/">http://id.nii.ac.jp/1265/00000310/</a>

# 伊波普猷「沖繩人の祖先に就て」

## 編者序文

以下に掲載するのは、伊波普猷「沖繩人の祖先に就て」の全文である。一九〇六年十二月五日から九日にかけて『琉球新報』に掲載された本論考は、伊波の「日琉同祖論」を考える上で重要な論考である。

この論考の反響の大きさ、そして伊波の並々ならぬこだわりぶりは、本論考が『琉球新報』に掲載されて以降、改訂されながらいくつもの媒体に転載されていったことからうかがえよう。

## ●沖繩人の祖先に就て(一)

伊波普猷

徳川時代の學者は藤井貞幹といふ人があつて「南島語」を著して島嶼の系統及び古代の古語風俗習慣等を比較研究して日本と支那朝鮮との關係の存在を説いて諸琉球等を民族の主である日本の島嶼は其の太古の後にある神武天皇は建寧の重平島に御生れにまつたといふやうな説を出した所が本居翁之を見て大に憤慨され「州狂人」と稱して反駁された貞幹の議論は随分狂暴で取るに足らぬものであるが日本が支那及び朝鮮と密接な關係を有つてゐると神武天皇の紀元が六百年も據るといふ議論などは今日の學者の研究と一致してゐる貞幹の説とて異ならずれば神祕の伊波屋島は日本民族の故

郷と見ないで明治九年迄を拂いて死んだ十八年の後(明治二十七年)再婚するチャムブレン氏神祕に近ひ種々の方面から神祕を調査し翌年の英領の地島嶼誌の四號五號六號に「琉球新報及びその住人」といふ六十頁の長文を掲げうの中に琉球人はその體質日本人とよく似てモンゴロイドのタイプを有してゐる彼等の祖先はかつて共同する根元地に住んでゐたが紀元前三世紀の頃大移動を企て對島を経過して九州に上陸しその大部隊は道々東北にまゐり行く先住人民を征服して大和地方に定住するに至つたその間に所の方には消ひつゝあつた少部分の者は恐らく琉球事件の爲に逃れて海に浮び遂に今日の琉球群島に定住するに至つたのであるらうとレハその地理上の位置でも他説の類似でも言語の比較でも容易く証明さ

三笥 利幸 編

「沖繩人の祖先に就て」原文の一部

(『琉球新報』1906年12月5日掲載)

すなわち、本論考は、「琉球人の祖先に就いて」と題名が変えられ、一九〇九年二月三日から十七日にかけて『沖繩毎日新聞』（以下『沖毎』と略す）に転載された。同年十一月には『沖繩青年』第七号（沖繩青年会創立二十周年記念号）に、また、同年十一月、十二月には『東亜之光』第四卷十一、十二号にも掲載された。一九一一年三月には、伊波はこれを『琉球人種論』と題して単行本化した（伊波の最初の著書となる）。さらに、題名がまた「琉球人の祖先に就いて」に戻され、一九一一年一月、論文集である『古琉球』初版の冒頭に収録された（二一六〇ページ）。この『古琉球』は、再版（一九一六年）、三版（一九三二年）、改訂版（一九四二年）と改訂されていき、収録論文が変更されたり、写真などの資料が加えられたりしていくが、「琉球人の祖先に就いて」はその冒頭におかれ続けた。

こうした経過をたどる「沖繩人の祖先に就て」は、実はすでに『沖繩縣史』に復刻されており（琉球政府編『沖繩縣史』第十九巻、三〇四—三二〇ページ）、この『沖繩縣史』版を底本として使用した研究がいくつも存在する。なるほど、本論考の掲載された『琉球新報』は沖繩県立図書館などのきわめて限られた図書館にしか所蔵がなく、それにくらべればまだ多少はアクセスしやすい『沖繩縣史』が利用されるのは当然のことであろう。しかし、先人の学恩を忘れてはならないといえ、この『沖繩縣史』版にはいくつかの不備がある。たとえば題名を「沖繩人の祖先に就いて」としてしまっていたり、原文どおりの復刻を基本方針としていたようだが、ところどころ不統一に現代かなづかいに変更していたり、誤字を訂正している箇所とそのまま残している箇所が混在したりしている。

そこで以下では、まず「沖繩人の祖先に就て」全文を、できるかぎり『琉球新報』掲載時の姿のまま復刻することを目指した。『琉球新報』紙面の雰囲気も伝わるように、旧漢字、旧仮名遣いのまま、原文に近いフォントを使用し、一行の文字数および行数は、新聞掲載原文と同じにして、『琉球新報』原文をそのまま文字を拡大したかたちで読める

ようにした。なお、原文には変体仮名が使われている箇所があるが、これに関してのみ、編者の責任において通常の仮名になおした。

もちろん、復刻をめざすだけであれば『沖繩縣史』においてすでになされた作業であり、そこに不備があればそれを指摘し補完すればよく、いまさらここで屋上屋を架す必要もないだろう。そこで、ここでは復刻だけでなく、本論稿に加えられた改訂のようすも示すことにした。本論考は伊波によって幾度も手を加えられていくが、以下では、伊波の代表作の一つと目される『古琉球』初版との異同を示すことにした。ただし、本資料では『古琉球』初版と一字一句に到るまですべての異同を示すという方針はとっていない。文章表現が変化しただけで本質的に変化のない軽微な変更や追加などについてはあえて指摘しなかった。すべての異同を一つ残らず示すと、原文に傍線や記号が極端に増えて読みにくくなり、また、かえって改訂の意味が見えにくくなってしまふと判断したからである。原文復刻の目的が損なわれずかつ改訂の意味がはつきりわかるような指摘をすることを心がけた。また、伊波が本論考を『古琉球』に収めるにあたって、長大な加筆をした箇所がいくつもある。煩をいとわずすべてを引用した箇所もあるが、用例の提示などが大半を占めるような場合には、適宜引用を省略したり、編者がその内容を要約して示したりした場合もある。以上のように『古琉球』初版についてはその原文をすべて引用しているわけではない。必要な場合は原著を参照してほしい。

復刻にあたっては、沖縄県立図書館所蔵の『琉球新報』当該号、同図書館所蔵『東恩納寛惇新聞切抜帳15』所収の『琉球新報』当該号（切り抜き）、および、早稲田大学中央図書館所蔵『琉球新報』当該号（マイクロフィルム）を利用した。『沖毎』『沖繩青年』『琉球人種論』『古琉球』なども、おもに県立図書館所蔵図書・資料を利用し、『古琉球』に

ついては九州大学図書館所蔵図書をあわせて利用した。また、『東亜之光』については、沖縄県立公文書館所蔵のものを使った。本資料作成にあたっては、九州国際大学の学生有志（石井適、韓菲、喜多島里美、清田伸二、下地優香、花盛亜理沙）に校正作業において協力してもらい正確を期したが、それでもなお誤記やミスが残っているとすれば、すべて編者の責任である。

なお、これは2006年度科学研究費（若手研究B）の成果の一部である。

## 凡例

本資料では、伊波普猷「沖縄人の祖先に就て」をそのまま復刻することを原則とした。ただし、以下のように原文を整理し、また、のちになされた改訂のようすがわかるような工夫をしている。

(1) 漢字、仮名遣いは原文どおり、旧漢字、旧仮名遣いとした。ただし、変体仮名については編者の責任で通常の仮名に直した。

(2) ふりがなは原文どおりとした。ふりがなには、ひらがな、カタカナが混在しているが、原文のままである。なお、ふりがなで「ママ」とあるのは、誤植、誤記を編者が指摘したものであり、原文には存在しない。また、付記しておけば、本文<sup>203</sup>ページ下段に出てくる「歌」に付された「アーゴ」というふりがなの「ア」は、原文では時計回りに90度回転して「ㄨ」と誤植されていたが、これについては編者の責任で訂正しておいた。

- (3) 掲載日ごとに行番号を行末に5、10、15……のように示した。もちろん、原文には存在しない。
- (4) 本文中でゴシック体になっている箇所は、改訂によって削除された——『古琉球』初版には存在しない——語句や文章である。
- (5) 改訂で加筆された箇所には、「**加筆**」と示し、注を付け、加筆された語句や文章をゴシック体で巻末に示した。なお、本文はなく、「**加筆**」という指示のみがなされている行がいくつかあるが、それは加筆によって新たに一段落が挿入されたことを意味する（たとえば、注24が付された箇所などがこれに該当する）。
- (6) 改訂で修正された箇所には、傍線を付し、注を付け、修正された語句や文章をゴシック体で巻末に示した（なお、例外的に傍線を引かず、ページ数と行数で当該箇所を示した場合もある）。
- (7) 今日からみれば不適切な表現と思われるものも存在するが、原文をそのまま正確に示すことが本資料の目的であり、学術的にも意義があると判断し、そのままにした。
- (8) 印刷状態が悪く判読が容易でない文字があったが、そのひとつひとつを断ることなく判断を下して復刻している。判読ミスがあるとすれば、すべて編者の責任である。

『琉球新報』一九〇六年十二月五日

## 沖繩人の祖先に就て(一)

伊波普猷

徳川時代の學者に藤井貞幹といふ人があつて『衝口發』を著して皇室の系統及び古代の言語風俗習慣等を比較研究して日本と支那朝鮮との關係の存在を説いて素盞鳴尊を辰韓の主である日本の皇室は呉の太伯の後である神武天皇は琉球の恵平也島に御生れになつたといふやうな説を出した所が本居翁之を見て大に憤慨され「鉗狂人」を著して反駁された貞幹の議論は随分乱暴で取るに足

5

らないのであるが日本が支那及び朝鮮と密接な關係を有つてゐることや神武天皇の紀元が六百年も減るといふ議論などは今日の學者の研究と一致してゐる貞幹の説をして眞ならしめば沖繩<sup>(1)</sup>の伊平屋島は日本民族の故郷になるのである今日の學者の中でも之に似た説を唱へてゐる人がある先般東京日日新聞で久米邦武先生は「日本民族の故郷」といふ題で日本民族はもと南支那にゐたが琉球を経て日本島に來たのであるといふことを書いて居られる沖繩<sup>(2)</sup>にも亦沖繩人の祖先は山東省から來たといふ口碑があるシカシ以上の説は空中の樓閣で何れも足がない即ちその両端をつなでゐる琉球その者の研究に

20

15

10

手が届いてゐない人もし人種學考古學言語

學などの力をかりて琉球群島の研究に従事

したら思ふに過ぐる事があらう(加筆) 古史神話

の語る所によれば沖繩人(5)の祖先も矢張天か

ら降つたといふ事であるがその所謂天なる

所は果してどの邊をさすのであらう余は少

しくこの問題の解釋を試みよう

二百三十一年前に死なれた(加筆) 羽地王子向象賢

はその「仕置」といふ隨筆の中に

竊惟者此國人生初は日本より爲渡儀疑無

御座候然者末世之今に天地山川五形五倫

鳥獸草木の名に至迄皆通達せり雖然言葉

之餘相違者遠國之上久敷通融爲絶故也五

穀も人同時日本より爲渡物なれば云々

25

といふことを書いてゐる氏は言語の類似を見

て沖繩人を直ちに日本人種に属するものと

したのである氏の時代は日本崇拜の時代で

あつたことを心得て置かねばならぬ向象賢

の説は明治の初年に至つて琉球最後の政治

家宜灣朝保氏によつて布衍された(加筆) 宜灣氏は

古事記萬葉の古語に例を取り日本内地では

既に死語となつたものが沖繩に残つてゐる

といつて四十餘の言葉を集めてゐる(9) 今二三

の例をあげて見るとうはなり、くわなり(後)

妻(サリ)、前妻(コサド)あけづ(蜻蛉)あかとんき(暁)いが

(我が)等の如きものである氏はこの稿の完

成を見ないで明治九年憂を抱いて死んだ(10)

八年の後(明治二十七年)言語學者チャムプ

40

45

50



レン氏沖繩<sup>(11)</sup>に遊び種々の方面から沖繩<sup>(12)</sup>を調査し翌年の英國の地學雜誌の四號五號六號に「琉球諸島及びその住民」といふ六十頁餘の長文を掲げその中に

55

琉球人はその體質日本人とよく似てモン  
ゴリヤンのタイプを有してゐる彼等の祖  
先はかつて共同なる根元地に住んでゐた  
が紀元前三世紀の頃大移動を企て對馬を  
經過して九州に上陸しその大部隊は道を  
東北にとり行く先住人民を征服して

60

大和地方に定住するに至つたその間に南  
の方に追ひつゝあつた少部分の者は恐ら  
く或大事件の爲に逃れて海に浮び遂に今  
日の琉球群島に定住するに至つたのであ

65

らうソレハその地理上の位置でも傳説の  
類似でも言語の比較でも容易く証明さ  
れる

といひ更にその著書琉球文法に於て二者が  
最も著しい系圖的關係を有つてゐることを  
言語學上から推論された即ち

70

この二國語の語法及單語を備サに比較す  
るにその相一致してゐることはちようど  
スペイン語のイタリー語に於けるやうで  
ある今もしこの両語の祖語なる者があつ  
たとしたら日本語は其祖語の或部分を多  
く保存し琉球語はその他の部分を多く保  
存してゐる而も現今の日本語が上世の日  
本語を代表するよりも琉球語がそれを代

75

表するのが一入忠實であるそれは動詞の

語尾變化に於てことにあらはれてゐる(13)

氏は之を次のやうにあらはしてゐる

祖語

上世日本語(14)——近代日本語

(上世琉球)(15)——近代琉球語

『琉球新報』一九〇六年十二月六日

## 沖繩人の祖先に就て(二)

伊波普猷

チャムブレン氏の説は向象賢氏の説と暗合

してゐる實にチャムブレン氏がいへる如く(16)

80

現代の琉球語には上世の日本語の残つてゐ

るのが多い單語でいへはナイ(地震)アケツ

(蜻蛉)のやうなものである(17)音韻でいふとP

音のやうなものであるハヒ(フ)へホの古音

はパピブペボの破裂的両唇音であつたが七

世紀以前からファフィフフェオの摩擦的両唇

音に變じ十五六世紀(足利の末)から更にハ

ヒ(フ)へホの喉音に變り初めたとは學者間

の定論になつてゐる(ソシテこの運動の中

心點たる近畿地方をさる遠い地方即ち奥羽

又は九州にはなほ古音が多く保存されてゐ

る)(18)今日吸フ等のフも古くは文字通り發音

したのである琉球語では吸フといふことはス

ブルといつてゐる七世紀以前の日本語でも

15

10

5

之はスブと發音したに相違ない其他シホカラシ(鹹)をシブカラサといふのもよい例である日本文明の影響を多く受けなかつた國頭や先島では今尙パビブペボの音が盛に使

20

はれてゐる例へば日本語の大<sup>ナ</sup>といふことは沖縄語ではウフ國頭と先島ではウブである日

本上世の音は沖縄に多く遺つてゐるといふ

ことがわかる<sup>(10)</sup>又動詞の活用を研究しても面白

い日本語の原形動詞は四段の活用に近いと

25

いふ説が有力であるが琉球語の動詞は凡て

四段に活いてゐる實に古事紀<sup>マヤ</sup>萬葉の中に僅

ばかり残つてゐて七世紀以前の形をほのめ

かしてゐる動詞の活用に酷似してゐる<sup>(20)</sup>又現

今沖縄群島の數のかぞへ方を日本上世のソ

30

レと比較したら思半ばに渦<sup>マ</sup>ぐる事があらう日本の數詞には日本式と支那式との二ツがあつて支那式のは殆んど日本式ののうち勝つてしまつたシカシ文明の光に浴しなかつた先島には今尙七世紀以前の數へ方に髣髴たるのが残つてゐる日本では古くはトヲ

35

カアマリヒトヒ(十一日)ハツカアマリフツ

カノヒ(廿二日)ハツカミカノヒ(廿三日)と

いふやうにいつたが八重山の歌にもトヲカ

ミカ(十三日)といふのがある宮古<sup>アイ</sup>の歌にも

40

トヲカヨカ(十四日)といふのがある八重山

では今尙十一より二十に至るまでは固有の

となへ方をしてゐる又百をムムといつてゐ

る宮古に至つては一入古代の面影を止めて

あるムスツ(卅)ユスツ(四十)……フタムム

(二百)ムムヌピト(百人)の類である沖繩で

も古くはナ、ソ(七十)ムムヌ(百人)トモ、

ソ(千人)ヤモ、(八百)といふやうに用ゐた<sup>(21)</sup>

<sup>(22)</sup>モシ言語が人種の所属をきめる完全な尺

度であつたら以上の例で沖繩人は直ちに他<sup>(23)</sup>

府縣人と祖先を同じうする者になる——の<sup>(24)</sup>

であるシカシ世には三百年も立たない中に

自國語を忘れて支那語を話す滿洲人もある

言語は兎に角アテにならぬチャンブレン氏

の言語學的研究はベルツ博士やデーデルラ

イン博士や鳥居氏等の人種學者研究によつ<sup>(25)</sup>

て確實になつたのであるよしや言語學的証

明のみであつたにしろ七世紀以前沖繩人の

55

45

言語に大變化を與へる丈けの日本民族の大  
勢力が沖繩諸島に及んだといふことは承認し  
なければならぬシカシ上古に於てかういふ  
大々的征服があつたとしたら吾等はどうし  
て之を覺えずに居られよう?

<sup>(25)</sup>

これから一つ土俗の方面でしらべて見よう

沖繩人が日本上世の特徴ともいふべき曲玉

を使用してゐることは注意すべ事と思ふ沖繩

では曲玉を玉珈玻璃<sup>タマカハ</sup>又は珈玻璃玉<sup>ガイラダマ</sup>といつて

古くは一般にはいてゐたが今日では儀式の

時祝<sup>トイシ</sup>がはくのみである<sup>(26)</sup>馬來人の故郷に近い

與那國では四五十年前までは盛に使用して

ゐたとのこと千數百年前に日本内地で跡を絶

70

65

60

つた風俗が今猶琉球群島に遺つてゐるといふことは頗る妙ではないか<sup>(27)</sup>

屋<sup>(28)</sup>

沖繩では妊婦がある時にはその屋根を葺がないといふ習慣があるが内地の方でも之に

似たことがあるるな古事紀を讀んで見ると

ウガヤフキアエスミコト

豊玉姫か鵜葺草不合命を生まうとした時に

海邊に鵜の羽を葺草にして産殿を作つたが

ウラドノ

その産殿まだ葺きあへぬに御腹たえかたく

なつて子が生れた……そこでその産みませ

る御子を天津日高日子波限建鵜葺草不合命

と名づけたといふことがある前にのべた遺

風はかういふ所から來たのであらう又古語

拾遺に鵜葺草不合命が御生れになつた日海

濱に室を立てたら掃部の連の遠祖が供奉り

85

75

て幕を作つて蟹を掃つたといふことがあるが  
(今の掃守は蟹守の轉したのであるといふ  
ことがある)沖繩には子供が生れると川下り  
といふのがあつて赤子に着物を被せその上  
から小さい蟹を數疋はゝせる儀があるかや  
うな傳説が出來た頃までは沖繩人はまだ九  
州の一部にゐたのであらう<sup>(29)</sup>

90

その外誣歌童謠がよい証據になることがある  
内地で雷がなる時に「桑原く」といふことが  
ある沖繩でも「桑木のまた」又は「桑木の下  
だやべる」といつてゐるこれは内地では意  
味がないが沖繩では一種の意味がある昔雷  
が桑のまたの所に落ちてソコにはさまつて  
死んでたので雷は桑の木をこはがるといふ

95

所から來たのである奥羽のどこかでは雷が

なる時に桑の葉をかざすといふことがある又

かういふことは八重山にもあるとのこと中部

で意味を失つた文句が兩端に於て意味を有

つてゐるのは頗る注意すべきことと思ふ内地

でよく子供が「お月様いくつ十三七」といふ

ことを歌ふしかし何の意だかさっぱりわから

ない古くは何か意味があつたに相違ないが

どうかしてその中の一句若しくは二句が落

ちてしまつたので全く無意味のものになつ

た八重山のショーサー節(?)は多少その原

形をほのめかしてゐる

月の美さきよらや十三日トヲカミカ

みやらべ美さトヲナハや十七

ナント面白い歌ではないか! 〔30〕

『琉球新報』一九〇六年十二月七日

## 沖繩人の祖先に就て(三)

伊波普猷

〔31〕 〔32〕

その他神話傳説の比較も大切である中に就いてその開闢の神話を比較すると面白い

「ありきゑとのおもろおさうし」中の「むか

しはじめからのふし」は琉球の開闢を歌つ

たオモロである<sup>(33)</sup>

むかし、はちまりや、てだと

大ぬしや、きよらや、てりよわれ。

せのみ、はちまりに、

てだ、いちろくが、

てだ、はちろくが、

おさん、しちへ、みおれば、

さよこ、しちへ、みおれば、

あまみきよは、よせわちへ、

いねりきよは、よせわちへ

しまつくれ、てゝわちへ、

くにつくれ、てゝわちへ、

こゝらきの、しまく

こゝらきの、くにく

5

しまつくら、ぎやめも、

くにつくら、ぎやめも、

てだこ、うらきれて、

せのみ、うらきれて、

あまみや、すぢや、なすな、

いねりや、すぢや、なすな、

しやれば、すぢや、なしよはれ。

25

15

盛に對句が使つてある韻もふんである、「最初に日神があつて闇を照した日神俯して下界を膽給ふに島らしいものがあつたからアマミキヨ、シネリキヨの二神に詔して島を造らせた二神詔のまにく下つて數知れぬ島々を造つたかくてその成るを告るや日神更に命じて從順な人類を生ましめた」とい

30

20

ふ程の意である試に古事記の開闢の條の一節を記して見よう

こゝに天つ神もろくの命もちて伊邪那

岐命、伊邪那美命二柱の神にこのたゞよ

へる國を造り固めなせとのりこちて天の

沼矛を賜ひてことよさし賜ひき故二柱の

神天の浮橋に立たしてそのぬぼこをさし

おろして畫きたまへば鹽こをろくに畫

き鳴して引き上げ給ふ時その矛のさきよ

り垂る鹽積りて島と成る是れ淤能基呂島

なり

著しき類似といはなければならぬ沖縄開闢

の神なるアマミキヨの名は沖縄人の祖先が

九州から來て奄美大島を経て沖縄に來たこと

45

40

35

を証明する手がかりになると思ふ

奄美大島の住民も亦自らアマミキヨの子孫

と稱してゐる彼等の口碑によればアマミキ

ヨは初海見嶽に天降つて大島を經營したが

暫らくの後南の方沖縄へいつたといふことで

ある栗田翁は姓氏錄考に於て奄美を解釋し

て海人部とされたが實に穩當な説である余

はアマミキヨを以て一人の名にしないで種

族全体の名にしたいオモロにあらはれた琉

球古代の人名の語尾には大概キヨがついて

ゐるタダミキヨ、ナオチキヨの類であるア

マミキヨは即ち海人の部落の人といふ意で

ある「海見嶽及び奄美大島」の名稱はかつて九

州の西南岸にゐた沖縄人の祖先が沖縄島に

60

55

50



来る前に暫らく大島にゐたといふことを語る  
簡単な歴史であるその外沖繩人の祖先が九  
州にゐたといふ証據に琉球語に「ユ、ム」と  
いふことがある口の尖つた人のことであるこれ

は鹿兒島語の「ヨモ」と同語である「ヨモ」は猿の  
意である思ふに沖繩人の祖先はかつて猿を

見てゐたが南島に移住するに及んでは屋久  
島以南には絶へて猿を見ないので其子孫の  
世に至つては「ヨモ」なる語は正しくその實物  
を指すことが出来ずいつしか顔の猿に似た  
人を「ヨモ」といふに至つたのであらう

以上の証明で向象賢やチャムブレの假定説  
はいくらか確かになつたがさて沖繩人の祖  
先が大和民族と手を別ちて沖繩群島に移住

70

65

したものとしたらその當時沖繩群島は無人  
の境であつたらうかこれ少しく考究すべき  
問題である

75

『琉球新報』一九〇六年十二月八日

## 沖繩人の祖先に就て(四)

伊波普猷

一昨年(明治三十七年)の夏鳥居氏が沖繩探  
験の結果は端なくもこの問題に解決を與へ  
たその研究結果の一端は「沖繩諸島に住居  
せし先住民に就いて」といふ論文で昨年

の正月の太陽に出たこれまで沖繩(48)に石器時

5

代の遺物が存在してゐるといつた人はあつたがそれが何人種によりて遺されたものであるかは未だかつていつた人がなかつたそれはこれまで發見された石器土器に人種的特徴を示すものがなかつたからである然るに

10

鳥居氏が中頭郡中城間切荻堂村の銀ナシヤ岩の

貝塚で發見した土器石斧牙の裝飾形狀輪廓紋様等はよくその人種的表出を示して日本の石器時代のソレと同一系統に属するものであることがわかつた即ち沖繩(48)にアイヌが

15

たといふことになる先是沖繩諸島にアイヌがゐた形跡があることをとなへたのは獨乙の動物學者デーデルライン博士で奄美大島の住

民中に顔面胴部手指共に多毛を以て覆はれた

20

たが多いのを見てアイヌの血が混じてゐると断言されたベルツ博士も小倉の師團で大島の兵士百五十人の体格を測つて同一のことをいはれた鳥居氏も沖繩人(50)中に毛の多いのがゐるのを見てわれらの血管中にも聊かアイヌの血球が流れてゐるといはれたチャムブレン氏は宮島幹之助氏の材料によつて與那國島にアイヌ的地名のあるのを知り古くは沖繩群島にもフイヌマヤがゐたに相違ないといはれた實際沖繩諸島の地名の中で日本語ではどうしても解けないのがアイヌ語で容易解けるのがあるヒラ、ピラ(坂)の如き語であるヒラはアイヌ語の崖がといふことで

30

25

ある肥後の五ヶ荘あたりでも坂のことをヒラ  
といふさうだ本居翁が古事記のヨモツヒラ  
サカのヒラを阪の義に解されたのは面白い  
その外に金武<sup>キム</sup>(アイヌ語の山派<sup>ヤマ</sup>)屋久、種子、  
楚邊、サンパ等もアイヌ語で解ける<sup>(51)</sup>

35

沖繩島及び大島では到る處に鬼(毛人)退治  
の傳説があるがこは多分二者接觸の消息を  
ほのめかすものであらう又宮島幹之助氏が  
人類學雜誌に出された「琉球人の入墨とア  
イヌの入墨」といふ論文は二者の間に何か  
關係があつたことを教える

40

鳥居氏は昨年四月の太陽に「八重山の石器  
時代の住民に就いて」といふ論文を掲げ石  
器時代の遺物遺跡で十五六世紀の頃まで八

45

重山の獅子森の山腹に僅に馬來人が生存し  
てゐたのであらうと想像されたが八重山や  
與那國<sup>(52)</sup>に倭人風俗の傳説があるのを見ても  
古くは沖繩群島の南部まで馬來人が來てゐ  
たといふことがわかる(人肉嗜慾心の熾な  
のはマレイ人種とパプアン人種であつてモ  
ンゴリヤ人種には少い)八重山の英雄が與  
那國へ渡り食肉人種を征伐した口碑などは  
よく南島に於ける蒙古族<sup>(53)</sup>と馬來族との接觸  
を想像せしめる<sup>(54)</sup>

55

50

『琉球新報』一九〇六年十二月九日

## 沖繩人の祖先に就て(五)

### 伊波普猷

以上述べ來つた諸説を總合<sup>マ</sup>しる見ると自然  
左の如き結論に到達する

<sup>(56)</sup>  
最近の說によればアイヌ人種の故郷は亞細  
亞の高原であつたが漸次東方に向つて朝鮮  
半島及び黒龍江一帯の地域に下り一部分は  
カムチャツカを経て北海道に入り一部分は  
朝鮮海峡を経て九州に入つたといふことであ  
る思ふに紀元前三世紀頃<sup>(57)</sup>に於ける天孫人種  
の大移住は實に九州に於けるアイヌの中堅

5

を突いたかくてアイヌの一部分は道を東地  
に取つて中國に逃れた神武天皇の一行が行  
くくアイヌを征服して大和に入つたことは  
古史神話の語る所であるもしチャムブレ  
ン氏の假定説をして眞ならしめば沖繩人の祖  
先は暫らくの後海に浮んで沖繩群島に移住  
してアイヌを壓したことになる新しい年代に  
よると神武の紀元元年は西曆紀年の初年に  
當るさうだから沖繩人<sup>(57)</sup>がこの島に來たのは  
何れ紀元後のことであらう

<sup>(58)</sup>  
七世紀の頃に南島人がはじめて大和の朝廷  
に來たことは國史の語る所であつて當時譯語<sup>マ</sup>  
を設けて相互に意思を通じたといふことがあ

20

15

10

- るから九州地方と南島との交通はその以前からあつたといふことがわかるシカシ分離後六七百年も経たことであるから大和言葉と沖縄言葉との間には餘程の差が生じたと見えるこれから十二世紀の頃まで沖縄本島の住民が大和又は筑紫に往來してゐたことはオモロを見てわかる何よりもよい証據は今日に至るまで沖縄人が内地のことを大和といつてゐることである<sup>(59)</sup> 島津氏の琉球征伐以後沖縄人が内地へ行くのをノボル(上國)といったのは不志議<sup>マヤ</sup>でもないが尙眞王以前(四百年前)にも矢張ノボルといふ語を用ゐてゐたオモロに「……くすぬきはこので、やまとふねこので、やまとたびのぼで、やしろたびのぼ
- 25
- 30
- 35

- て、かはらかいにのぼで、てもちかいにのぼで、といふとがある<sup>(60)</sup> 「くすぬき」は船のことである神代記の天の石楠舟<sup>いはくすね</sup>と比較したら面白い<sup>(61)</sup> 思ふにノボルといふ語は上古の殖民地人がその祖先の古郷に對していつた語で後世日本との政治的關係が付いてからいひはじめた語ではない
- 以上は吾が沖縄人種論である至つて散漫ではあるがとにかく事實を根據とした人種論であるモシ他日反對の事實が多く上つたら余は此の議論を棄てるに躊躇するものではない余は事實であつたら食肉人種の子孫といはれてもかまはないと思ふ幸にして余が研究の結果は沖縄人が日本人たる資格はア
- 40
- 45
- 50

イヌや生蠻が日本人たる資格と自ら別物であることを教えたシカシ二千年の間この南島に彷徨したことであるからいくらか變種になつてゐるに相違ない今や吾等は二千年前に手を別つた兄弟と邂逅して同一の政治の下に生活するやうになつた余は常に沖繩

55

の言語風俗習慣等を内地のソレに同化させる外に双方の血を混ずるといふことは國民的統一の点から見ても沖繩人の幸福の点から見ても然るべき手段と思ふ是れ二千年といふキレメをつなぐ唯一の手段である(元)

(82)

60

## 注

凡例でも述べたとおり、『古琉球』本文の語句や文章についてはすべてゴシック体を使用している。編者による解説や付記などについては、すべて明朝体を使用した。また、□で括った数字は、『古琉球』初版のページ数である。

- (1) 琉球〔2〕
- (2) 琉球〔2〕
- (3) 自分等〔2〕
- (4) この嶋嶼の住民は殆んど同一なる言語風俗習慣容貌氣質を有してゐる。〔2・3〕
- (5) 琉球人〔3〕
- (6) 琉球の經世家〔3〕
- (7) 言語の上から琉球人の祖先は日本から渡つたといふ説を唱へた最初の人である。〔3〕
- (8) 宜灣氏は位三司官サンシク(大臣)に上つた人で、松風齋と號し和漢の學に通じてゐた、ことに和歌は薩摩の歌人八田知紀の門下でも緒々の名があつたといふことである。〔3・4〕
- (9) 氏は向象賢の説に賛成して、古事記・傳・萬葉集などを見るに、日本上古のことは爰には今も多く残りといつて、三十餘の琉球語を取り出して記紀萬葉中の古語と比較してゐる。〔4〕
- (10) この語彙はいろはのみだしをにおいて皆餘白をにおいてあるから稿本の中でも着手始めのものであることがわかる。

氏は王政維新の慶賀副使として明治五年上京したが、琉球國王の藩王にされたのを受けたといつて反對黨の忌む所となり、辭職後明治九年憂を抱いて死んだ。左にその琉球語彙の拔萃を紹介せう

いめ。夢なり、……（計十五個の語句とその解説が挙げられるが、これらについて引用を省略する）

以上は日本々土では既に死語となつたもので今尙琉球群島で使はれてゐるものゝ重なる例である。〔4・8〕

沖繩島〔8〕

琉球〔8〕

(11) (12) (13) 要するに二國語の相互的關係をスペイン語とイタリー語の相互的關係否むしろスペイン語とフランス語の相互的關係に比較しても大過はなからう。〔10〕

(14) 古代日本語〔10〕

(15) 古代琉球語〔10〕

(16) 以上三氏〔11〕

(17) 思ふに島或は山中の如き不便のところには、言語も亦その他のものと共に其原形に近い形式を以て殘留せるは、爭ふべからざる事實である。この點に於て琉球群島は天然が時間ネチニテを場所タイムに現はして吾人に與へたる恩惠の一例である。左に自分が琉球の古語及び方言に就いて調査した結果の一端を録して、チエムフレン氏の説を確かめて試よう。先づ煩を厭はず宜灣氏の語彙に出てゐない單語を少しばかり紹介せう、

まゝき。 オモロニ「えけ、……（計十八の語彙について例示されるが、これらについては引用を省略する）



## (19) (18)

まだ澤山あるがこれ位にして置く。以上の言葉、記紀萬葉源語の如き日本古代の文學を讀んだ筈の無い小さい島々の愚民が日常使つ口ゐると聞いたなら、誰れしも驚かすには居れまい。思ふにこれらの言葉はたしかに琉球人の祖先が大和民族と手を別ちて南方に移住した頃に有つてゐた言葉の遺物である。今日の琉球語には鎌倉以前の言葉や薩摩の方言が多く混じてゐる。琉球語の單語は十中八九までは日本語と同語根のものであるといつても宜しい。たゞ音韻の變化や語尾の變化によつて一寸きいては外國語のやうであるが、能くきいてみると日本語の姉妹語であることがわかる。[11-14]

然らば琉球群島の方言はこの問題に對しては如何なる位置に立つのであらうか。[15]

左に音韻の表を作つて首里國頭八重山宮古大島の五方言を比較したら、音韻變化の階段が一目瞭然である。

	首	里	國	頭	八重山島	宮古島	奄美大島
葉	fa <sup>ハ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup> > ha <sup>ハ</sup>	pa <sup>パ</sup>	fa <sup>ハ</sup>	
春	fa <sup>ハ</sup> > haru <sup>ル</sup>	pa <sup>パ</sup>	fa <sup>ハ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	haru <sup>ル</sup>	
齒	ha <sup>ハ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	fa <sup>ハ</sup> ha <sup>ハ</sup>	
柱	haya <sup>ハヤ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	haya <sup>ハヤ</sup>	
臍	fusu <sup>フス</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	fusu <sup>フス</sup>	
島	hataki <sup>ハタキ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	pa <sup>パ</sup>	hatahe <sup>ハタヘ</sup>	

(20) この表によつて琉球の標準語及び奄美大島<sup>アヤマシ</sup>の方言ではF(ファ行)からH(ハ行)に移りつゝあることがわかり、國頭宮古八重山ではP(パ行)からF(ファ行)に移りつゝあることがわかる。實に琉球に於ては推古朝以前の音韻變化と足利時代の音韻變化が一度に見られるやうになつてゐる。(「P音考」参照)〔16・17〕

(20) ここは新たな段落として、次の一節が加筆された。

又その係<sup>カヘリムスビ</sup>結のことを比較するのは一入趣味がある。琉球語の係結と餘程好く似てゐる、……(例示は引用を省略する)……これで日本語と琉球語とは詳細の點まで一致してゐることがわかつて思ふ。(「琉球語の掛結に就いて」参照)〔17・19〕

(21) 前ページ29行目からここまでの「数詞」にかかわる議論については、『新報』版より多少用例が増える程度の変更がなされたが、本質的な變化はなく、引用は省略した。ただ、トモモソ(千)にかんしてだけ、「トモゝはモゝ(百)のトラ(十)といふことであ」り、「思ふに琉球人の祖先が大和民族と分離せし當時はその言語には千といふ思想をあらはす言葉はまだ無かつたのであらう。」「21」という考察が加えられている。

これまで述べた證明で日本語と琉球語とは姉妹語であることが略ぼわかつたが、〔21〕

琉球人〔21〕

日本人と同人種〔21〕

(25) (24) (23) (22) さてここに二者の體質の類似に就いてはくはしく述べることが出来ないから、其中で餘程面白さうな例を一つあげてみようと思ふ。日本人の生るゝや多くは其臀部に青色の班點があるが、これは歳月の經つに従つて消失するものである。これは他の人種には絶えて見ることが出来ない特質であるが、琉球の赤子も生れる時には皆この面白

い特質をもつてゐて二三歳の頃に消失するといふことがある。この面白い例文でも二者が同一の人種であることの証明が出来ると思ふ。〔22〕

- (26) 八重山島ではつひ二百年前迄女が之をばいてゐたことは西暦千六百九十三年（清の康熙三十二年）の曲玉買入禁止に關する古文書を見てわかる。

口上之覺

當島往古より女上下至迄かはら玉はき申候……（以下、「曲玉買入禁止に關する古文書」原文については引用を省略する）

この古文書を見ると、八重山の方では往古から女が曲玉をはき來つたのを、日本の商人などが見て、一入立派な曲玉を製造していつて賣りつけたといふことがわかる。〔23-25〕

- (27) 先島では曲玉のことをマガラタマといつてゐるが、これは珈瑠羅玉と同語で矢張曲玉の意である。又女の神官の曲玉のはき具合が内地の古墳から堀り出す土偶のそれに似た所のあるのは面白いと思ふ。〔25〕

其他ちよつとした習慣の中にも馬鹿に出来ないのがある。〔25〕

- (29) (28) 古語拾遺を讀んで見ると、彦瀲尊誕生之日、海濱ニ立レ室、于時掃守連遠祖天忍人命、供奉陪侍、作レ簪掃レ蟹、仍掌ニ鋪設、遂以爲レ職、號日ニ蟹守、今俗謂ニ之掃守者彼詞之轉也といふことがある。これらの琉球の風習と日本の傳説との間には何等かの關係があるに相違ない。〔26〕

- (30) 琉球群島はさながら天然の古物博物館である。こゝにはナリヤム・モリスの詩情を動かしさうな神話傳説がいくつでもある。古事記の開闢説に似た琉球創世の説話もある。アダマイブの罪惡神話に似た戀島の物語もある。浦

(31)

島の説に似た與那原<sup>ユナバル</sup>の濱物語もある。羽衣傳説に似た鏡<sup>ミカド</sup>苺<sup>イチ</sup>子の傳説もある、これは羽衣説話が謡曲文學に於て詩化されたやうに、琉球の戯曲作者玉城<sup>タマキ</sup>朝薫<sup>アサカ</sup>の筆によりて詩化されて残つてゐる。又三輪<sup>ミノワ</sup>山の説話の如き蛇神と人間との結婚説話もある。其外いろいろの神話傳説があつて、何づれの小島もそれ相應のわけ、へをもたない所はない。神話や宗教の比較研究は兩民族間の心理的一致を確むるに至つて必要なものであるが、こゝではくはしく述べる事が出来ぬ。神話傳説は慶安の頃に出來た「遺老説傳」に網羅してある。(琉球の神話「與那原の濱物語」参照)「28・29」

それから琉球の宗教に就いて少しく述べて置く必要があると思ふ。今日の沖繩人の宗教思想は可なり複雑であるが、その中から儒教や佛教などの分子を引き去つて見ると、日本の神道と殆んど同じ様なもののみが残る。彼等は日本人と同じく後世<sup>ゴセウ</sup>は暗黒な所で死人は穢<sup>ケガレ</sup>はしいものと思つてゐた。そして彼等の神は基督<sup>キリスト</sup>教の神のやうな天主とか世界の主とかいふやうなものではなくて、現に自分等の上<sup>カミ</sup>にゐて自分等を支配してゐる民族的の神であつた。その外彼等は山の神海の神火の神水の神風の神といふやうに多くの神々のあることを信じてゐて、王家の神官なる君々<sup>キミ</sup>や人民の神官なる祝<sup>ノロ</sup>ははその時節<sup>ノトキ</sup>にこれらの神を祭つてゐた。水が涸れないやうに、大風が吹かないやうに、天下が大平になるやうに、五穀が成就するやうに祈つたのである。家内安全とか七難即滅とか七福即生とかいふ個人的の祈願は女官、御双紙中の祝<sup>ウケカベ</sup>詞<sup>ノリ</sup>には絶へて見當らないのである。試に正月辨<sup>ベシ</sup>の御<sup>オ</sup>嶽<sup>タケ</sup>行幸の時の御<sup>オ</sup>たかへ(祝詞)をあげて見よう。

辨<sup>ベシ</sup>の御<sup>オ</sup>嶽<sup>タケ</sup>大嶽<sup>オホタケ</sup>小嶽<sup>コタケ</sup>いべつかさかなしけふのよかるひよりまさるひよりに、首里<sup>シユレイ</sup>天がなし美御前<sup>ミオマヘ</sup>のおちよわいめしわちへ御手<sup>ミテ</sup>づから御拜めしよわるげにさやは嶽<sup>タケ</sup>さは森<sup>モリ</sup>のいべつかさかなしとあいちへなりめしよわちへ

御祝物<sup>オユハヒモノ</sup>こんで御袖<sup>オンデ</sup>うけめしよわちへ天<sup>テン</sup>ぢあめちとふしめしよわちへ御月<sup>オツキ</sup>おてだ三<sup>ミ</sup>つ星<sup>ホシ</sup>七<sup>ナナ</sup>つ星<sup>ホシ</sup>の御前<sup>オマヘ</sup>とあいちへなりめしよわちへ首里<sup>シユイ</sup>天<sup>テン</sup>嘉<sup>カ</sup>那<sup>ナ</sup>志<sup>シ</sup>美<sup>ミ</sup>御前<sup>オマヘ</sup>の御月<sup>オツキ</sup>のおやく御日<sup>オツキ</sup>のおやくおしのけめしよわちへ御命<sup>オマヘ</sup>のつな御星<sup>ミホシ</sup>のつないよづくまぢよく十<sup>ト</sup>百年<sup>モ、トヒヤクサイ</sup>十<sup>ト</sup>百<sup>モ、</sup>歳<sup>サイ</sup>ぎやでも百<sup>モ、</sup>かほうのあるやに御守<sup>モ、</sup>めしよわちへ又<sup>タウ</sup>唐<sup>ヤマト</sup>大<sup>オウ</sup>和<sup>ワ</sup>の御船<sup>オウネ</sup>宮<sup>ミヤ</sup>古<sup>コ</sup>八<sup>ハチ</sup>重<sup>ジュウ</sup>山<sup>サン</sup>島<sup>シマ</sup>々<sup>々</sup>浦<sup>ウラ</sup>々<sup>々</sup>の舟<sup>フネ</sup>上<sup>ウヘ</sup>り下<sup>シタ</sup>りのふ事も百<sup>モ、</sup>かほうのあるやに御守<sup>モ、</sup>めしよわちへ御<sup>オ</sup>た<sup>タ</sup>ばいめしよわ

これ文<sup>フミ</sup>けでは日本文化の影響を受けた首府で出来た祝詞であるからあてにならぬと言ふ人があるかも知れないから、日本文化の影響を餘り受けてゐないと思はれる高<sup>タカ</sup>離<sup>ハナレ</sup>島<sup>シマ</sup>の神<sup>カミ</sup>人<sup>ニン</sup>が六<sup>ロク</sup>月<sup>ゲツ</sup>八<sup>ハチ</sup>月<sup>ゲツ</sup>のシノゴ祭<sup>カミンチュ</sup>に神に告ぐる詞を出してみよう。

あまん世<sup>ヨ</sup>のし<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>野<sup>ノ</sup>原<sup>ハル</sup>米<sup>メ</sup>たち出<sup>デ</sup>てしちや百姓<sup>ヒョウシヤウ</sup>の祭<sup>サカ</sup>りしやべらばよがほう御<sup>オ</sup>給<sup>タマフ</sup>べめしよわちニライカナイからつ<sup>ツ</sup>もんよりもんお助<sup>タ</sup>けてお給<sup>タマフ</sup>へめしよわれ國<sup>クニ</sup>も榮<sup>サカ</sup>へ代<sup>ヨウ</sup>も榮<sup>サカ</sup>へ諸<sup>シヨ</sup>臣<sup>シン</sup>下<sup>カモ</sup>茂<sup>モ</sup>たへ榮<sup>サカ</sup>へしめらちお給<sup>タマフ</sup>べめしよわれかくの如<sup>スガ</sup>く朝廷<sup>テイテイ</sup>では天神<sup>テンシン</sup>を祭<sup>サカ</sup>り村落<sup>リョク</sup>でも氏神<sup>ウジガミ</sup>を祭<sup>サカ</sup>り上<sup>ウヘ</sup>下一<sup>シタ</sup>致<sup>チ</sup>其<sup>ソノ</sup>家<sup>カ</sup>業<sup>ギョウ</sup>を勵<sup>カチ</sup>み、島民<sup>シマミン</sup>は安心<sup>アンシン</sup>して年貢<sup>ネンクウ</sup>を納<sup>ナゲ</sup>めたので所謂<sup>シヨクニ</sup>島國<sup>シマクニ</sup>は安穩<sup>アンオン</sup>であつたのである。これが即ち琉球に於ける祭政一致の状態<sup>サカ</sup>で、上古<sup>コノ</sup>の沖繩人<sup>シユウゼツジン</sup>は上下<sup>ウヘシタ</sup>共にこの祭<sup>サカ</sup>りを樂<sup>カシ</sup>みに生きて居<sup>イ</sup>た程<sup>ハジ</sup>である。今尙<sup>イマ</sup>さうであるかも知れぬ。沖繩人は實に「生<sup>ナマ</sup>」の味<sup>アジ</sup>を忘<sup>ワスレ</sup>れることの出来ない人<sup>ヒト</sup>民<sup>タタ</sup>である。世に沖繩人程その祖先を知<sup>チ</sup>りたがる人民<sup>ジンミン</sup>は居<sup>イ</sup>まい、この傾向<sup>ケウキョウ</sup>がやがて琉口<sup>リウコ</sup>群島<sup>グンシマ</sup>の民<sup>タタ</sup>は皆同胞<sup>ケイドウ</sup>であることと意識<sup>イシキ</sup>させて、琉球王國<sup>リウキュウオウコク</sup>の統一<sup>トウイチ</sup>を容易<sup>ユウイ</sup>ならしめたのである、かつて琉球政府<sup>リウキュウセイフ</sup>が宮古<sup>ミヤコ</sup>八重山<sup>ヤエヤマ</sup>を同化<sup>ドウカ</sup>させた時には政治家<sup>セイジ</sup>家を遣<sup>ツキ</sup>すと同時に其地<sup>ソノチ</sup>の豪族<sup>ゴウシュク</sup>の女<sup>メ</sup>を祝<sup>イハヒ</sup>に任命<sup>ニニン</sup>してその民族的宗教<sup>ミンジクテウキョウ</sup>の布教<sup>フキョウ</sup>に骨<sup>ハネ</sup>を折<sup>ヲ</sup>つたのである、沖繩人が嶮惡<sup>ケンアク</sup>なる波濤<sup>ハタウ</sup>と戦<sup>タケ</sup>ひつゝ所謂<sup>シヨクニ</sup>三十六島<sup>サントウシマ</sup>の民<sup>タタ</sup>を率<sup>スベ</sup>ひて一個<sup>イツゴ</sup>の國王<sup>コウワウ</sup>を建設<sup>ケンセツ</sup>したといふことは政治的<sup>セイジテキ</sup>人民<sup>ジンミン</sup>たることを

(32) 証して餘りあり、この点に於ても彼等はその北方の同胞に酷似してゐる〔29・32〕  
次にその精神的産物なるオモロの見本を紹介して、それが如何にその北方の同胞の精神的産物なる「萬葉」に酷似してゐるかを見る必要がある、「おもろおさうし」は二十二冊、歌數總べて千五百五十一首、西暦十三世紀の初葉から十七世紀の中葉まで殆んど四百年間のオモロを収めたので、□□の萬葉集ともいふ可きものである、オモロは琉球人の祖先が遺した最古の文學であるが、琉球が島津氏に征服されてから頓に衰へていつしか祭司詩人の専有物となり、元來詩歌といふ意義を有してゐたオモロは遂に神歌といふ狭い意義を有するやうになつた。そして近代の祭司詩人は今の神主が神詞を綴るやうに古い鎔にはめてオモロを作つたのである、オモロの中には琉

口の創世紀を初として、王者を謳うたもの、英雄を謳うたもの、詩人を謳うたもの、航海を歌うたもの、戦争を歌うたもの、自然を歌うたものがある。唯一ツ戀を歌うたものもある、世にオモロを措いて琉球固有の思想と琉球古代の言語を研究すべき資料はない試に戀を歌うたオモロから紹介してみよう。

かつれんまみにやこはやておちへ……………（以下では、「戀」「天體の美」「オモロ詩人アカインコ」についてそれぞれオモロ原文を引きながら、いかにそれが萬葉集と類似するものであるかが示されていくが、引用は省略する。）〔32・38〕

(33) 以上言語や神話や土俗や宗教や文學などの例証で、琉球が日本々土と密接な關係を有することがわかつて來たから、今は琉球人の祖先がどうして琉球群島に移住するやうになつたかといふことを述べる場合となつた、先づおもろおさうし卷の十にある琉球の開闢を歌うたむかしはぢめからのふしに就いて研究してみよう。〔38〕

(34) 琉球〔41〕

- (37) (36) (35)  
琉球人〔41〕  
琉球〔41〕  
そこでアマミキヨは奄美や海見と内容上の関係のある事がわかる。して見ると加藤三吾氏がその「琉球乃研究」で説かれた如くアマミキヨは種族全體の稱であつて一人の名でない事もわかる。併し自分は加藤氏が天孫氏といふのはアマミクの漢譯でアマミクはスマミヨ又はアマミキヨであるとの説には賛成しかねる。アマミキヨがアマミとキヨとに切る可き言葉であつて、アマミとキヨとに切る可き言葉でない事はシネリキヨといふ神の名を見てもわかる。又この開闢のオモロにあるアマミヤ、シネリヤの二語を見てもわかる。アマミヤ、シネリヤはこゝでは天つ國の意に用ゐてはあるものゝ、この二語の元來の意味はアマミの家、シネリの家といふ事で、琉球人が昔ゐた故郷をさすのである。即ち海人部の家の義である。〔41-42〕
- (38)  
又親にナザイキヨ(生む人)若い人にワカイキヨといふ古語のあるのを見ても、キヨはコ(子)といふ事ではなくて、ヒト(人)である事がわかる。さうするとアマミキヨは天の御子ではなくして海人部の人といふ事が能くわかる。(琉球語にはエ(e)の短母音はないから、メ(yo)はミ(mi)となり、ヨ(mi)はb(ヒ)に入りかはる事があるから、ビはミになつたのである、)〔42-43〕
- (42) (41) (40) (39)  
東南岸〔43〕  
琉球人〔43〕  
沖繩〔43〕  
琉球人〔43〕

(44) (43)

琉球人〔43〕

それは兎に角沖縄島に於ける彼等の上陸地は何の邊であつたであらう。琉球の上古史は麥栗黍が天然に久高島クダカに生じ、稲苗が知念玉城チケンフツスに生じたと語つてゐる。久高島は沖縄島の南部島尻郡の東海上一哩餘の所にある小島で知念玉城はその對岸なる島尻郡の一部である。つい近代まで二月には久高の行幸があり、四月には知念玉城の行幸があつて、國王親ら天神地祇を祭つてゐた。彼の向象賢もその著『中山世鑑』にこの事を是報本返始之大祭也と書いてゐる。『おもろおさうし』卷の十九(西曆一六二三年編纂)に、

ちゑねんもりぐすくかみおれはぢめのぐすく

といふ事がある。『知念嶽城は神が始めて天降りたる城』といふ意である又

ちゑねんもりぐすくあまみきよがのだてはぢめのぐすく

といふ事もある。『知念嶽城はアマミキヨがはじめて神に祈りたる城』といふ意である。玉城タマシロの百名仲村渠ヒヤナナカンシの高地にミントンといふ所があつて、此處はアマミキヨが始めて住居した城だといふ口碑がある、現にミントン天降アメトリと云言葉も遺つてゐる、此に由て之を觀れば、アマミキヨ種族は最初久高島に到着し、それから知念に上陸して玉城に居を卜したのであらう。玉城の名も亦いくらかその歴史を語つてゐるやうに見える、琉球語では城のことをグスクといふが、八重山では石垣で圍うた所をグスクといつてゐる、金澤博士がかつて沖縄教育會で述べられた演説の一節に、

このグスクと云ふ言葉は沖縄人が大和民族であるといふことを證明する好材料となるのであります、朝鮮の古語では村のことをスキ村主のことをスクリ(宿稱と同意義)と申します。この言葉は日本語にも遺つて日本の



(49) (48) (47) (46) (45)

沖繩島〔48〕

沖繩島〔47〕

琉球群島〔47〕

南島〔47〕

アマミキヨ種族〔47〕

である。〔43・46〕

位の名にもなつてゐたのでありますが、それと同意義の言葉が日本語では城と書いてシキと讀んで居ります、大和の地名にシキと云ふ所がありますが、又シキシマ(敷島)といふ日本國の名にもなつてゐます、シキは城といふことになります。シキといふ言葉を研究して見ると先づ二つに分けることが出来ます。シは住むと云ふ意味で、キは圍カキの中と云ふ意味であります。即ち圍の中に住むといふ意になります。(中略)然らば日本語でシキ朝鮮語でスキといふ事は一體どういふ所を指してさう云ふたのであるかと云ふと、高いところにあつて石の壁で取圍まれて居る所といふ意味であります。中略それで日本語のシキも朝鮮語のスキも琉球語のスクも皆城壁といふ意味であります。是等の名詞で正鵠を得た判断が出来るので、沖縄は敷島即ち日本の一部分であるといふ事は争ふ可からざる事實であります。歴史がなくとも、傳説がなくとも記録がなくとも、神話がなくとも、沖縄人の祖先は日本人のそれと同じくシキの中に住んで居た事が證明されます。

といふ事があつたが、アマミキヨ種族は沖縄島に上陸して後もグスクを築いてその中に居たのである。(グスクのグは敬語である。)これらは皆沖縄人の祖先がその北方の同胞と共同なる根元地に住してゐた事を證明する好材料である。〔43・46〕

(51) 琉球人〔48〕

で土人の言によれば特に西方日の餘計に當る所にいふとの事。又鹿兒島其附近の地方でも坂の事をヒラといふ事があるとの事。ヒラはアイヌ語の崖ガクといふ事である。沖繩では非常に峻はしい坂の事をサカヒラヒラといふが、これを古事記のヨモツヒラサカと比較して考へると面白い。本居翁は古事記傳にヨモツヒラサカのヒラを坂の義に解された。その外企武キム(アイヌ語の山脈)といふ山つゞきの所がある。堅健ケンケンといふ山間の村落がある。その村を越して具志堅クシケンといふ所がある。又邊戸崎ヒド、アツタ村(海岸の砂多き所)、與那口のソナイ、ヒナイ西イリオモテ表島のソナイ、屋久島(アイヌ語鹿の義)、種子島タネ(アイヌ語長キの義)などの如きも確かアイヌ的地名である。〔49〕

(52) 琉球人の祖先〔50〕

それは又琉球諸島の住民中時としては馬來眼マレイヤンを有するのがあるを覚えてみよう。〔50・51〕

(53) 白鳥博士〔51〕

(54) 琉球人〔51〕

(55) 彼等〔52〕

(56) ここにもまた沖繩教育會に於ける金澤博士の演説の一節を引照して自説を確めてみよう。

(57) 言語の研究では他のもので知ることが出来ないものさへ知ることが出来るが、これを適切ならしむる爲めに沖繩人は何處より來たかといふことに就いて私の考を述べることに致しませう。沖繩人は何處より渡來したので

あるかに就いては歴史にもなく、又何等の記録もないのであるが、言語學上から沖繩人の祖先が九州から來たといふことを証明する二三の事実があります。第一方角の名稱によりて九州から來たことが明かにわかります。……中略……又ニシ(西)といふ言葉はイニシ(過去)といふ事であるから自分等が通つて來た所といふ意味でありませう。……中略……今沖繩語を研究して見ますれば、……中略……北のことをニシといふのは妙であります。何故に北のことをニシといふのか。前にも申した通り、ニシはイニシ(過去)と云ふ意味であるから、これによつて沖繩人が北より南に向つて進んで來たことが明かにわかります。

(59) (沖繩でははゞかりはどこでも家のうしろに造つてあつて、ニシといつてゐる。)即ち沖繩人が過ぎこし方をニシといふのはこれやがて彼等が北の方九州より南方に來た事を証する好材料である。〔52・54〕

(60) 後世大和は鹿兒島をさすことになつて、明治十二年頃の沖繩人は東京を鹿兒島と區別するに大大和といふ語を用ゐた。〔55〕

(61) これは「……楠船クスフネを造りて、大和船を造りて、大和の旅に上りて、山城ノボロの旅にのぼりて、瓦ノボロを買ひにのぼりて、品物を買ひに上りて、……」といふ程の意である。〔56〕

ことに大和に瓦ノボロを買ひに行くといふことは一入面白いことである。自分がかつて學友東恩納君ヒガワナと中頭郡の浦添城趾に遊んで、經文を書いた灰色の瓦の破片を澤山發見したことがあるが、その二三を拾つて東恩納君を介して東京なる其道の人に鑑定して貰つたら、これが謙倉時代の瓦であることがわかつた。これで古くは琉球では内地から瓦を取り寄せて王侯貴族の家を飾つたといふ事がわかつたと同時に、謙倉時代に於ける内地と琉球との交通が頻繁であつた事もわかつた。また琉球語に謙倉時代の言葉の多く混じてゐる理由の一部は明白になつた。(前にも述

(62)

べた如く琉球語が今日の日本語と比較して違ふ所はその言語をその單語並に文法上の形式に於て日本語の古い形特に鎌倉時代以前のもものが多く遺存せられてゐる事である。これは全く内地では其後世々政治上交通上の變動があつて其影響の爲めに言語上に變轉を來したに拘らず、琉口に於ては只多少政治上の變動はあつたが、他に激烈な變動が無く、さうして言語上に多くの變動を及ぼさなかつた爲であらう。かくの如く昔ながらの日本語も多く遺存してゐるが、頻繁な交通によつて鎌倉時代の大和言語の輸入されたのも少くはあるまい。〔56・57〕

ところか間もなく日本々土では南北朝の内乱が起り、南方の沖繩でも三山の分争が始まり、瀬戸内海や九州の西南岸に海賊が横行した爲に、二者の交通は全く斷絶した。此間に琉球の中部に割據してゐた中山王察度は始めて支那大陸に通じて臣を朱明に稱するに至つた。先是沖繩島の周圍に散布せる島々及び奄美大島<sup>アミ</sup>は漸く琉球王國に附屬するやうになり、中山王が支那との交通を開始した時は、その往來の途上に散布せる宮古八重山の住民は自分等以外に自分等に似た人間があるといふことを知つて、始めて一入開化せる北方の同胞に身を託するに至つた。かくの如くにして琉球民族の統一は出來たのである。降つて尙眞王の頃(四百年前)に至り、彼等は能く日本及び支那の文明を消化して自家獨特の文化を發揮させた。即ち内にあつては中央集權を行ひ、おもしろうしを編纂し、自國語の金石文を刻み、外にあつては支那日本暹羅朝鮮瓜哇呂宋等の諸國と通商貿易をなした。併しアマミキヨ種族の海上王國は島津氏の南下と葡萄牙人の東漸とによつて次第に衰運に傾いた。かくて半死の海上王國は年毎に綾船を發して方物を薩洲に收め、又進貢船を出して貢物を支那に奉つたが、實際に於ては互市貿易を營んだのである。爾來漸く支那に従順なるにつれて遂に綾船を薩洲に遣すことが疎かになつたのもまた例の利害得失の考から打算せる結果に過ぎない。然るに豊太閤出て、海内を一統するに及んで、その朝鮮半島

に用ゐたる勢力の餘波は間もなく慶長十四年の琉球征伐となつて現はれた。是れやがて琉球の日本に對する經濟的關係を一變して政治的關係となすの關節である。こゝに於てさしも盛なりし尙氏の海上王國は遂に變じて島津の寶庫となり、かつて南洋の津々浦々を遍歴せし波濤の健兒はいつしか石原小石原の陸生動物と化し去つた。それから明治の初年に至るまでの琉球の存在はむしろ悲惨なる存在であつて、言ふに忍びない位である。そこで自分は明治初年の國民的統一の結果、半死の琉球王國は滅亡したが、琉球民族は蘇生して端なくも二千年の昔、手を別つた同胞と邂逅して、同一の政治の下に幸福なる生活を送るやうになつたとの一言でこの稿を結ばう。(明治三十九年十二月十五日稿、琉球新報及東亞之光所載)

(附記)右の論文で、琉球人の祖先はかつて九州の東南岸に居た海人部即ち海人の部落であつたらうと推測したが、現在九州の東南岸に海部とかいふ地のある事は氣が付かなかつた。所が此頃豐後の南海部郡の關といふ人から自分が想像した所に海部といふ魚業の盛な所のあるといふ事や、南海部の大島といふ小島の風俗習慣が奄美大島のそれと似てゐると云ふ事を聞いてヒントを得た。〔58・60〕